

# 博物館だより

No.215

令和6年10月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都郡みやこ町豊津 1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー  
2024年10月

日	月	火	水	木	金	土
29	30	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	1	2

休館日 ※情報はR6.9.19現在

## ◆博物館NEWS

みんなで活かそう・未来へ繋ごう「みやこ町の宝」

## みやこ町ふるさと遺産フェスタ開催！

今年のマ「生誕140年 夏目漱石最愛の弟子・小宮豊隆」  
日時：10月20日(日) 場所：小宮豊隆ゆかりの史跡&博物館

みやこ町の豊かな自然・文化遺産を活かしたまちづくり・「学習」の場づくりを目指す学びの祭典「ふるさと遺産フェスタ」を、今年も以下の要領で開催します。

今年のテーマは「生誕140年 夏目漱石最愛の弟子・小宮豊隆」。犀川久富出身でドイツ文学者となった小宮は、文豪漱石から愛され、時に作品のモデルとなり(代表作『三四郎』、漱石の業績を末永く世に伝える続ける研究者として大成しました。そんな小宮をマンガを通じてソフトに楽しく学びたい…この願いを叶えてくれるゲストとして、夏目漱石と門下生の日々を描いたマンガを多数執筆している香日ゆらさんの講演を予定しています。香日さんと共に「三四郎」してみませんか？



▲『三四郎』初版本と小宮豊隆(作品と同じ帝大入学の頃)本は作品単行本化の際、漱石が署名して小宮へ進呈したもの



▲左：香日ゆらさんが描く小宮豊隆/右：香日ゆらさん(自画像)香日ゆらさんプロフィール(漫画家・青森県生まれ。著書に『先生と僕-夏目漱石を囲む人々』『JK 漱石』などがある)

### 主な学習イベント

○午前の部(9時~11時半)

★歴史たんけんウォーク

「三四郎」を歩く・語る・見つける

★要申込/定員15名(先着順)

★参加費200円/雨天中止

○午後の部(13時~16時)

★歴史文化カレッジ

①開講行事 主催者あいさつほか

②講演「漱石門下筆頭?マンガで

読み解く小宮豊隆」

漫画家 香日ゆら氏

★要申込(定員50名) 参加費無料

★わたしのお気に入りふるさと遺産絵画作文コンクール入賞作品展示&入選者表彰

★記念企画展「夏目漱石最愛の弟子小宮豊隆」

\*詳細はHP等に掲載になるか博物館宛てお問い合わせください。

## ◆講座・教室・催し物ガイド 10月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

10月5日(土) 9時30分~

【古文書講座】

10月14日(月) 10時~

【古典かな講座】

10月19日(土) 9時30分~

【みやこ学講座】

10月26日(土) 10時~

※日程等変更となる場合があります。

※見学会等は別途ご案内します。

## 小宮豊隆旧居跡が新たな町指定文化財(史跡)に指定されました

みやこ町教育委員会では、未来へ伝え残すべき町の宝(文化財)として新たに「小宮豊隆旧居跡」を指定し、その旨告示しました(告示は5月31日付)。

旧居跡は犀川久富にあり、漱石作品『三四郎』の舞台として、作品をイメージさせる景観が今なお息づいている「史跡(人物関係遺跡)」として評価されました。

今後は町の宝としての活用策等について、関係者や地域の皆さん等の意見も伺いながら検討を進めます。



▲新たな町指定文化財(史跡)となった小宮豊隆旧居跡 泉水や古井戸、周囲の景観は作品時期と大差ない

## 8・9月の業務日誌から

8月18日(日)、博物館で「昭和の暮らしと風景展」のギャラリートークを実施しました。当日は、山口県など遠方の参加者もみられ、機械化以前の農作業の道具や昭和30年前後の暮らしについて学芸員が説明を行いました。

9月2日(月)以降、町内の指定史跡各所で台風10号による被害の片付け作業を行いました。甚大な被害こそありませんでしたが、枯木の転倒や解説板の倒壊など、対応を要する小規模被害が各所で確認されました。



▲豊前国府跡公園の北側入口で確認された解説板の倒壊 重量があったことから飛散の被害を免れた



▲細部までリアルに表現された人形に皆さん驚きの様子でした。

# みやこの歴史発見伝 171

## 「食」の物語

### 官兵衛ブームから10年

大河ドラマ「軍師官兵衛」の放送をきっかけに、黒田官兵衛（1546～1604）ゆかりの史跡が所在するみやこ町から「大分県中津市」に及ぶ豊前地方一帯で沸いた「官兵衛ブーム」から今年で10年を迎えます。みやこ町では、官兵衛が築いた「馬ヶ岳城跡」に多くの観光客が訪れ、また城跡が町の文化財に指定されるなど、ドラマをきっかけに、文化財の重要性を再認識する機会となりました。タイトル「軍師」は戦術を考案するなど指揮官をサポートする役職とされ、ドラマでは黒田官兵衛が考案した戦術によってピンチを切り抜け、合戦に勝利する場面がありました。この当時、一般的に、刀や弓矢、鉄砲などの武器や兵士の数から合戦の勝敗を見極めながら戦術が練られましたが、黒田官兵衛はさらに地形や天候、兵士の生活環境などの情報を把握し、状況に適した戦術を考案することに長けた武将といわれます。これらの中でも彼が戦術上、最も重視したものが「兵糧」とよばれる「食」でした。

### 令和の米騒動

日本では古くから米が食べられてきました。町内では、黒田工ノヲ遺跡（勝山黒田）や犀川小学校校庭遺跡（犀川本庄）で約2000年前の籾粒が出土して

いることから、みやこ町でも、この頃には既に米が食べられていたと考えられます。その後、今日に至るまで日本人の食を支えた米は、単なる「食料」という位置付けを越え、税など、この国の政治・経済を支える基盤となりました。このように2000年以上にわたって日本の食卓で親しまれてきた米ですが、本年9月初旬以降、国内各地の店頭から米が消え、また米を店頭に並べてもすぐに売り切れるといふ異常事態が発生しました。31年前の平成5年（1993）年、冷夏や日照不足が原因で米の収穫量が激減したこと、米の買占めが発生したこと、需要を満たすために、タイから米を緊急輸入するなど、翌年秋の収穫時まで続いた2連の事態は「平成の米騒動」と呼ばれました。様々な食品の物価高騰の中で発生した今回の「令和の米騒動」でも店頭で米を求めるとの長い列がみられ、米が日本の食生活に欠かせないものであることを改めて認識することができました。

### 「戦わずして勝つ」戦術

政府は「平成の米騒動」を教訓として、不作や大災害などの緊急時に対処するため常に一定量の米をキープする「備蓄米」を制度化しました。家庭などで備蓄している米のことを「兵糧米」とよぶことがありますが、これは古来より戦争時において軍隊に蓄えられた食糧のことを指します。人は食べなければ生存することはできません。これは平時も戦時下でも同様であり、古くから「腹が減っては戦ができぬ」といふ諺が伝えられています。

これは日本に限ったことではなく、フランスのナポレオンが食糧補給の重要性を例えた「軍隊は胃袋によって行進する」という言葉が伝えられています。このように軍隊では兵士の数に応じた大量の食糧を補給、調達できなければ、いかに強力な兵器を持った軍隊であっても全くその能力を発揮することはできません。戦国時代には1人5合の兵糧米が支給されたという記録がみられ、兵の数や合戦の規模が大きくなれば莫大な量の兵糧米の調達が不可欠となります。豊臣秀吉の元で軍師として仕えた黒田官兵衛はこの点に注目し、天正9年（1581）鳥取城（鳥取県）を攻めた際に、前年からこの城周辺の米を高値で買い占め城内への米の搬入を阻止します。さらに城下の人々を城内に逃げ込ませ備蓄米の消耗を早める策をとりました。また翌年の高松城（岡山県）攻めの際にも、堤を築いて周辺の河川や梅雨時期の大雨を利用して城の周囲に水を引き込み城は完全に孤立し、食糧の供給は絶たれてしまいました。いずれも敵方の城内は飢餓状態に陥り、味方の兵を失うことなく城攻めは成功します。「兵糧攻め」とよばれるこの戦術は前述の諺を城攻めに反映させたものです。従来の戦いの常識にとらわれず「戦わずして勝つ」官兵衛が考案した作戦により勝利した豊臣秀吉は、知略に秀でた官兵衛を重用しながらも、その能力を警戒するようになります。秀吉は官兵衛の軍功に対し、天正15年（1587）、豊前国（現在の北九州市から大分県宇佐市に及ぶ行政範囲）のうち3分の2にあたる6郡（京都・仲津・築城・上毛、下毛、

宇佐）の12万石を恩賞として官兵衛に与えます。秀吉に仕えた他の武将と比較すると、官兵衛の大活躍に対する恩賞としては「少なすぎる」ものですが、その要因として秀吉が官兵衛を警戒したことが挙げられています。しかし彼は不平を漏らすことなくこれを受け入れ、みやこ町と行橋市にまたがる「馬ヶ岳城」を居城とします。天正15年（1587）3月29日から豊臣秀吉がこの城に2晩宿泊した記録が残されています。

### 福岡の名付け親

黒田官兵衛は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という戦国時代を代表する3人の武将を支え、彼が携わった50以上の合戦では度も敗れたことはありませんでした。またその類まれな才能は軍事だけでなく多岐にわたりますが、最後に力を注いだのが福岡城とその城下町の都市整備でした。特に「福岡」の地名は彼の先祖が拠点とした備前の「福岡」（現在の岡山県の瀬戸内市）に由来するもので、官兵衛は「福岡の名付け親」ともいわれます。九州を代表する都市、福岡の礎は彼によって整備され、その思いは大切に受け継がれながら現在も発展を続けています。

### 形見は「弁当箱」？

官兵衛は59歳でその生涯を閉じます。死の間際、息子の長政が官兵衛から受け取った「形見の品」は、名刀でも茶器でもなく「面桶」と呼ばれる木製の弁当箱でした。この弁当箱を前にして「面桶



面桶

というものは飯を盛るものである。天子（天皇）から百姓に至るまで、食物がなくては一日として世に生き永らえる者はいない。国を富まし、士卒（兵士）を強くすることの根本は、この飯入れにあることを絶対に忘れてはならない。それゆえ、この面桶を形見として差し上げる」と述べて亡くなったと伝えられています。その後、官兵衛の跡を継いだ長政は、ある時、家臣が各々の褒賞の格差に不満を募らせていることを耳にします。彼は、その解決策として姫浜で漁師に網を引かせるイベントを企画し家臣を招待します。参加者が鮮魚と美酒で心身ともに満足したところで、長政は褒賞について自らの考えを説いたところ、これ以降、家臣が長政に不満を漏らすことは無くなると伝えられています。このように「食」を通じた人心掌握術は父親の「遺言」をもとに彼が考案した「食の戦術」であったのかもしれない。（井上信隆）